第4回

設問［形式別］

助動詞の意味・用法を中心に

今回の設問形式

［長い記述（80字以上）］の問題

今回は、［長い記述（80字以上）］の問題を中心に扱います。次の3つのチェックポイントを確認のうえ、文章読解に進んでください。自分のミスに自分で気づく力を養いましょう！

チェックポイント1

聞かれていることと無関係の怪答になっていないか？

例えば「友だちに無実の罪を着せられた」ことが原因で「悔しい気持ち」になった、ということを答えにまとめるとしましょう。

まず、気持ちの生まれた「原因」から書くことになりますが、この原因をくわしく（長く）説明しているうちに、最後に気持ちを答えなければならないのに、「〜から。」で終わっていたということはありませんか。長い答えを書いているうちに、設問を忘れて、関係のないことを答えていないか、こまめに確認しながら作業を進めましょう。長い記述解答は書くのが大変なので、「できた！」で、おしまいにしたい気持ちはわかりますが、それでは、いつまで経っても、内容の充実した解答が書けるようにはなりません。聞かれていることに対して答えていなかったり、具体例ばかり書き連ねただけだったり、比喩表現を解釈せずに抜き書きしたり、といった、本文を理解していないことが伝わってしまう怪答になっていないかどうか、答えを書き終わった後の確認は必須です。

チェックポイント2

一つの解答要素について延々と書き連ねていないか？

100字を超える長い記述の解答なのに、書かれている心情はたった一つ……ということが絶対にないとは言い切れませんが、長い記述問題は、気持ちの変化やいくつかの気持ちが同時にわき起こっている様子といった複数の解答要素を一つにまとめることが求められていて、答えるためにはひと手間も、ふた手間もかかるのがふつうです。解答に含めるべきポイントがいくつあるのか、答えを書き始める前に確認しておくのは当然ですが、複数の解答要素がどのような関係にあるのか、ということも意識してまとめることが大切です。心情であれば、「AからBへの変化」と「A、B、C…という思いが同時に渦巻いている」のとでは、まとめ方は大きく異なりますし、要旨なら、「A対Bという2つの要素の対比」から「結論」が導かれているといったように、複数の解答要素同士の関係を明らかにした構成にすることが求められます。

チェックポイント3

解答全体が意味の通じる内容になっているか？

自分の頭の中では分かっていることでも、それを正しく文章にすることができるとは限りません。長々と書いたはいいが、読んでも意味が通じなければ、それまでです。自分では理解しているので（理解していると勘違いしている場合もありますが）、そのとおりに書けていると思ってしまうのも無理ないことですが、主語や修飾語の抜けや係り受けのズレなど、他の人が読むと「？」となるところがチェックされずに残ってしまうことが多いようです。自分の解答を第三者の目で客観的に読む練習を積みましょう。他者の目による厳しいチェックを受けることで、ささいなミスによる失点をゼロに近づけることが期待できます。

入試必勝アドバイス

「長い記述問題」に答えるときは

自分の答えをチェックする「たくさんの目」を持とう！

【長い（80字以上）記述】の問題

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「*西島伍長、あなたにひとつだけ、教えてほしいことがあるんです」

*じゃーじゃの言葉の重々しさに、伍長はまた起きあがって、畳の上にすわった。

「あなたは特攻隊員だとおっしゃいましたが、志願されたんですか」

西山伍長は戸惑いの色を見せたが、ややあって頷いた。

「はい」

「やはり、特攻隊員というのは、志願されるんですか」

「そうですね」

西島伍長は言葉を濁した。じゃーじゃは訥々と話しはじめた。

「わたしの長男は四十歳を前にして、召集を受け、ブーゲンビル島で戦死しました。四度目の出征でした。それでも幸いにも、なんとか三人の子に恵まれ、一番上の孫は、わたしが言うのもなんですが、よくできた孫で、海軍に入り、フィリピンの特別攻撃隊に志願して、見事敵艦を撃沈したそうです。残りの孫は見ての通り、まだ幼く、一番下の孫は父親の顔も知りません」（中略）

「ただ、わたしには納得できないんですよ。神鷲とたたえられた名誉の戦死でありながら、こんなことを申すのは、非国民と言われてもしかたがないこととはわかっています。でも、同じ特攻隊員のあなたならわかってくれるのではないかと思い、お尋ねしたのです。どうか許してくださいね」

じゃーじゃは頭を下げた。伍長は祖父ともいうべき歳のじゃーじゃに頭を下げられ、戸惑っていた。手をのばし、じゃーじゃの頭を上げさせようとした。

じゃーじゃはそれには構わず、深く頭を下げたまま、しぼりだすように言った。

「家族思いのあの孫が、一家の大黒柱を失ったわたしたちを顧みることなく、特攻に志願したとは、どうしても思われないのです……」

じゃーじゃは思いきったように顔を上げた。

「本当に志願だったのでしょうか。あの子は本当に志願したのでしょうか。わたしは本当のことを知りたいんですよ」

じゃーじゃは、怯む伍長をまっすぐに見た。

「あなたはどうやって志願したのですか。言えないことはわかっています。それでもどうしてもお聞きしたいのです。決して誰にも言いません。どうか教えてください。冥土の土産に教えてください」

伍長とじゃーじゃはみつめあった。ぼくは唾を飲んだ。トーグラから、*カミのあじもあまも顔を出して、ふたりを見ていた。

イチみーが死んだときには、軍神として、町を挙げた葬式が行われた。先生に引率されて、学校から生徒みんなで参列した。イチみーに憧れない男子はいなかった。

カミのあまは手の甲で涙を拭った。イチみーの葬式のときは、参列者からしきりに「特攻戦死おめでとうございます」と声をかけられながらも、①涙の一粒もこぼしていなかったのに。

「申し訳ありませんが、フィリピンの、特攻が、どのように編成されたかは、知りません」

伍長はつっかえつっかえ、ぼそぼそと言うと、頭を下げた。

「ただ、自分のときのことは、お話しします。指名に先立っては、意思の確認をされました。白い紙と封筒を渡されたのです。志望する場

合は、志望と書き、志望しない場合は、白紙で提出せよ、と言われました」

じゃーじゃは頷いた。

「それでは、あなたは、その紙に志望と書かれたのですね」

伍長は首を振った。

「わたしはちょうど父を亡くし、戸主になったばかりでした。郷里には、病気の母と、幼い弟妹を残しています」

「では、白紙で出したのですか」

伍長はまた首を振った。

「なぜですか」

じゃーじゃは目を見張った。

「意思の確認といいながら、白紙で出せば、卑怯者の誹りは、免れません。国賊扱いされ、郷里の家族にも迷惑が、かかります。ただ、わたしの家庭の事情は、上官も知ってくれていましいた。そこでわたしは、上官が察してくれることに望みを託し、『命令のまま』と書いて、出しました」

「でも、あなたはここにいる。上官は事情を察してくれなかったのですか」

伍長は頷いた。

「やはり、同じような事情があって、同じことを書いた人間が、何人かいました。また、白紙で出した人間も、いたのです。彼の家は両親を亡くしていて、お姉さんひとりが、家を支えていました。自分が進学できたのは姉のおかげだと、つねづね言っていた彼は、早く自分が家を支えられるようになって、お姉さんに、幸せな結婚をしてもらうことを望んでいました」

をぅない神はたかさ。ヤマトゥでも同じなんだなとぼくは思った。

「それなのに、翌朝、部隊長は言ったのです。白紙は、一枚もなかった、と」

伍長はじゃーじゃをじっと見た。

「すべて、熱望する、と、書いてあったと」

まるで、じゃーじゃに救いを求めているようだった。

「それは、嘘ですねー」

伍長は小さく頷いた。

「何日かして発表された攻撃隊員名簿には、わたしの名前も、白紙で出した彼の名前も、入っていました。名簿を見て、すぐにわかりました。成績順だと」

伍長はかえって淡々と話しつづけた。

「わたしたちは飛行経験の少ない空中勤務者ですから、操縦技量の成績のよくないものは、そもそも、沖縄まで辿りつくことができない。意思の確認は、建前でした。白紙で出した彼は、成績がよかった。最初に指名を受けて出撃していって、帰ってきませんでした」

じゃーじゃの膝に置かれたこぶしが、ぶるぶると震えていた。

「ありがとうございます。よくわかりました」

じゃーじゃは深く頭を下げた。それを見た西島伍長も、同じくらい深く、じゃーじゃに頭を下げた。

「申し訳ありません」

西島伍長はそう詫びてから、顔を上げた。

「本当は、志願しました、勇んでいきました、と言うべきだと思ったのです。わたしも、そう書き遺して出撃しました。そうとしか書けないということもありますが、残されたものはどんなに悲しいかと思ったのです。②本当のことを申し上げて、申し訳ありません」

もう一度、西島伍長は深く頭を下げた。
「頭をお上げください」
恐縮するじゃーじゃに、西島伍長は頭を下げたまま、続けた。
「母は、わたしが特攻隊員になったことを知りません。いつも優しかった母は、弾代わりの特攻で死なせるために、わたしを生み、ここまで育ててくれたわけではないはずです。そして、わたしは、母になんの親孝行もできませんでした。だから、志望するとは、わたしは、どうしても書けなかった」
そのとき、飛行機の音がした。
見上げると、見たことのない飛行機が、月の光を浴びて、ゆっくりと飛んでいく。
空中に浮かんでいるのがふしぎなほどの速度だ。エンジン音もかたかたと、ひどく元気がない。息切れして、今にもとまってしまいそうだ。
「あれも特攻ですか」
じゃーじゃが訊ねた。
伍長は頷いた。
南へ向かう飛行機を見送って、カミのあじが庭に降り、月を拝むように手を合わせて拝んだ。
「とーとう、とーとう」
「海軍の練習機ですね。白菊といったかな」
月の光に顔をさらして、伍長は懐かしそうに見上げた。
「加古川の教育隊で、訓練中、よく瀬戸内海で出会ったものです。偵察員を何人も載せて飛ぶし、練習機ですので、速度は殆ど出ません」
伍長は、低空を飛んでいく飛行機を見送りながら言った。
「海軍も、あんな練習機を特攻に使うようになったんですね。あの遅さですから、日中飛べば*グラマンの餌食でしょう。だから月夜に飛ぶことにしたんでしょうね」
「とーとう、とーとう」
伍長は手を合わせるあじに目をやった。
「わたしの乗機も似たようなものです。九七式戦という戦闘機ではありますが、使い古された機体で、いつもどこかしら調子がわるかった」
伍長はそこまで話すと、はっとしたようにじゃーじゃを見た。
「もちろん、だからといって、不時着が許されるわけではありませんが」
伍長の声に力がこもった。
「でも、わたしは決して、命を惜しんだわけではありません。エンジンの故障だったんです」
みんな砂糖小屋に疎開して、ぼくたちのほかにはだれもいないシマに、伍長の声は響きわたるようだった。
「なー、ゆかんどやー」
カミのあまがトーグラから出てきて、伍長の背中を抱きしめた。
③「なたわ生きちたぼり。どーか生きちたぼりよー」
驚く伍長を、あまはぎゅうっと抱きしめて、くりかえした。
「どーか生きち、あまがとぅくるちむどぅてぃたぼりよー」
ぼくは庭に下りた。
月の出た夜は、足許が明るい。ぼくは、砂糖小屋に走って戻った。
（中略）
戦争なんだから、しかたがない。
それはぼくたちだけじゃなかった。
神さまだと思っていた特攻隊の兵隊さんも同じだった。
「すみませんって、謝ってたねー」

ぼくは伍長に言った。伍長は驚いた顔でぼくをふりかえった。
「ぼくが？　いつ？」
「運ばれてるとき。なんべんも謝ってたよ」
ぼくは、伍長をなぐさめるように言い足した。
「戦争だから、しかたがないよー。＊アガリヌヤーのおじいさんも許してくれるよー」
「そうだね」
伍長は考えこむように、荒れた畑を見た。（中略）
砂浜に降りると、なぜかぼくはいつも波打ち際に向かって駆けだしてしまう。
思わず五、六歩駆けたあとで、はっとしてふりかえると、伍長はカミと砂浜に立ちつくしていた。
「Aきれいだね」
伍長はウム畑で口にしたことをまた言った。それでも、海をみつめたまま、動かない。
「どうしたのー」
ぼくは伍長のそばまで引き返してたずねた。
「まだ生きているのが信じられないんだよ」
伍長はぼくを見もせずに言った。
「すべてが夢なんじゃないか。ここは天国のようだ」
ぼくとカミは目を見合わせた。それから、伍長が身じろぎもせずみつめている海に目をやった。
最近は浮遊物がないせいか、今朝は砂浜にはだれもいない。朝日を浴びた波は、きらきら光りながら、真っ白な砂浜に寄せてくる。島をぐるりと囲む珊瑚礁は、どんな荒波も打ち消して、おしとどめてくれる。水平線は真っ平らで、いつも通りの海だ。青い空にぽっかり浮かんだ雲が、鏡のような海面に浮かんでいる。
「それなに？」
カミは伍長の胸に下がる女の子の人形を指差した。
伍長は我に返ったようで、カミの人差し指の先を見下ろした。
「ああ」
伍長は人形のひとつを胸から外した。
「あげるよ」
伍長は人形をカミに差しだした。人形はきちんと白い開衿シャツを着て、絣のもんぺを穿き、頭には日の丸の鉢巻きを締めている。
「いいの？」
伍長は頷いて、砂浜に腰を下ろした。ぼくたちも伍長をはさんで横にすわった。カミは人形を両手でそっと包んだ。
「＊ゆうべは君たちもびっくりしたろう。こっちは生きてるのに、神さま扱いされる。ずっとなんだ。もう慣れた」
伍長は胸に揺れる人形にそっと触れた。まだ二つの人形が下がっている。
「これは、呪いだと思ってる」
ぼくは聞きまちがえたと思った。聞き返す間もなく、伍長は続けた。
「基地のまわりの＊挺身隊の女学生たちがね、作ってくれたんだ。特攻の成功を祈ってね。ひと針、ひと針」
ぼくとカミはカミの手の中の人形を見た。縫い目は見えないほどに細かかった。目と口は墨で描かれている。
「成功って、死ねっていうこと。死ねという呪いなんだよ。こわかったよ。ぼくたちが通ると、女学生たちが近づいてきてはね、手渡してくれる。④みんな花のようにきれいな顔をしてね。みんなわらっていたなあ」

日の丸の鉢巻きをしたおさげ髪の人形は、たしかにわらっていた。

「彼女たちだけじゃない。みんなね、成功を祈ってくれる。上官も、整備兵も、取材に来た新聞記者も、みんな。ぼくが本当に神になれるように。死んで神になれるように」

伍長は海をみつめてつぶやいた。

「本当に、みんな、きれいだったなあ」

カミは手の中でわらう人形を見下ろしたまま、どうしたらいいかわからず、固まっていた。

「ごめんごめん」

伍長はカミの様子に気づいて、その手から人形を取りあげた。

「やっぱりあげられないよ。これはぼくへの呪いだから」

伍長はまた人形を胸に下げた。

カミはほっとため息をついて、からっぽになった手を砂の中につっこんだ。手を汚してしまったとき、ぼくたちがいつもするように。

（中略）

「伍長さん」

ぼくが声をかけると、伍長はぼくを見た。

「ぼくは、もしいつか、特攻隊の人に会えたら、お礼を言いたいってずっと思ってたんだ。ぼくたちの島を守ってくれているお礼を」

「お礼？」

「この前、この沖に特攻機が三機落ちたんだ」

ぼくは珊瑚礁のむこうを指さした。

「島の上を飛んできたんだよ。それで南から来た＊シコルスキーにみつかって、追いかけられた。そうしたら、どの飛行機も沖へ飛んでいって、撃墜された。ぼくたちが地上にいたから、島に被害を与えないようにしてくれたんだ。だから」

「それはちょっとちがうかもしれない」

伍長はぼくの言葉をさえぎった。

「敵機に発見されたら、海上へ飛んだほうが、敵機には見えにくくなるんだよ。緑色に塗ってある翼が、海の色と重なって見えるからね」

伍長の言葉の意味がわかるまで、ちょっと時間がかかった。なんとかのみこめると、ぼくは続けた。

「でも、だって、特攻機はいつも島の上を通らないで、海の上を通っていくよー。もし撃墜されても、島に被害を与えないようにしてくれてるんでしょー。越山の兵隊さんが言ってたって」

「レーダーに捕捉されないよう、低空で飛ぶからね、障害物のない海上のほうが安全なんだよ。もちろん、島に被害を与えたくないというのは事実だけど、不時着する場合は島に降りるしかないしね」

伍長はこともなげに言った。

「そもそもぼくたちは未熟だからね、正直言って、そんな余裕はないんだよ。みんな晴れた日にしか飛べないし、ぼくは今回の出撃が初めての長距離飛行だった」

そういえば、特攻機は、晴れた日にしか飛んでこない。神さまは島を守っていたわけじゃなかった。

「最初で、それで最後の長距離飛行になるはずだったのに」

伍長は珊瑚礁のむこうを見た。

「ぼくはこんなところで生きている」

伍長はそうつぶやくと、ぼくたちをかわるがわる見た。

「ごめんよ。ぼくがすみませんって謝ってたのは、芋畑を荒らしたことじゃないんだ」

ぼくは、雨戸の上でうめいていた伍長の姿を思いだした。

「貴重な飛行機を失って、ぼくだけ生き残ってしまった」

伍長はまた海を見た。

「昨日、一緒に出撃したみんなは沖縄に辿りついて突入している。ぼくも昨日、みんなと一緒に死ぬはずだったのに。死んで神になるはずだったのに」

伍長は叫ぶようにそう言うと、頭を抱えた。

⑤胸で人形が大きく揺れた。

ぼくたちも黙りこんだ。

波の音と鳥の鳴き声が沈黙を埋めていく。

「ここにいれば？」

カミがぽつりと言った。伍長ははっと顔を上げた。

「もうヤマトゥに戻らないで、ずっとここにいれば？　戦争が終わるまで隠れていれば？」

思いきった言葉に、ぼくはまじまじとカミを見た。カミを見る伍長の顔はわからない。

いきなり伍長はわらいだした。

「Bきみはお母さんにそっくりだね。きっときみはいいお母さんになるよ」

わらって、わらって、目尻から流れた涙を拭った。

「生きててよかった」

わらいながら、そうつぶやいた伍長は、もう、神さまじゃなかった。

（中脇初枝「神に守られた島」より）

＊西島伍長…日本陸軍の特攻隊員（「伍長」は軍隊の階級）。沖縄に侵攻した米軍への、戦闘機による体当たり攻撃（特攻）に向かう途中、エンジンに不具合が起きたところを米軍機に襲われ、沖永良部島のウム畑（芋畑）に不時着した。
＊じゃーじゃ…「カミ」の祖父。集落の警防団長で、西島伍長を保護している。
＊カミ…「ぼく」の幼なじみの少女。沖縄地方の伝統的な童名（幼少期の名前）で、「カミ」は「亀」や「水甕」などの意味を持つ。
＊グラマン…米軍の戦闘機
＊アガリヌヤーのおじいさん…西山の飛行機が不時着したウム畑（芋畑）の持ち主
＊ゆうべは君たちもびっくりしたろう…島民たちは西島を「日本を守る神さま」として泣きながら拝み、手厚くもてなした。
＊挺身隊の女学生たち…地域や職場ごとに組織された若い女性たちの勤労集団
＊シコルスキー…米軍の戦闘機

問一　――線①「涙の一粒もこぼしていなかったのに」とありますが、カミのあまがイチみーの葬式のときに泣かなかったのはなぜですか。理由として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア　母親が取り乱し、泣き叫んでしまったら、大好きな兄を失った悲しみに黙って耐えている弟や妹たちに合わせる顔がないから。
イ　心の準備はできていたものの、愛する息子を失った悲しみとショックは想像以上のものだったので、ぼう然としてしまったから。
ウ　悲しみの涙は、特攻によって戦死した息子の名誉を汚すものであり、人々の目があるところでは平静を保つ必要があったから。
エ　葬式に参列してくれた人たちが口々に息子の戦死を祝福してくれたので、息子を失った悲しみがいつしか癒やされていたから。

問二　――線②「本当の～ありません」とありますが、伍長がこのように謝ったのはなぜですか。その理由をくわしく説明しなさい。

問三　――線③「なたわ生きちたぼり。どーか生きちたぼりよー」とありますが、カミのあまは伍長にどのようなことを言いたかったのでしょうか。「息子が戦地から無事に帰ってくることを願って

いた自分と同じように、〜」につながるよう、くわしく説明しなさい。

問四 ――線④「みんな花のようにきれいな顔をしてね。みんなわらってたなあ」とありますが、伍長のこの言葉からはどのようなことがわかりますか。わかることとして最もふさわしいものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 特攻隊員たちを見送る女学生たちが、何の疑問も罪悪感もなく、純粋に心の底から、特攻の成功、すなわち、隊員たちが死ぬことを願っていたこと。

イ 特攻隊員たちを賞賛し、自分の代わりにこの人形を連れていってほしいと笑顔で手渡す女学生たちが、本当は命を捨てる若者のことをあわれに思っていたこと。

ウ たくさんの女学生たちに見送られながら、特攻隊員たちは、この笑顔を守るために特攻という重要な任務を与えられたことを誇りに思っていたこと。

エ 女学生たちは、特攻隊員たちを見送りながら、隊員たちと違ってお国のために命を捧げることができない自分たちの立場をもどかしく感じていたこと。

問五 ――線⑤「胸で人形が大きく揺れた」とありますが、この表現は何かを暗に示していると考えた場合、それはどのようなことでしょうか。くわしく説明しなさい。

問六 ＝＝線「わらいながら〜じゃなかった」とはどういうことですか。……線A「きれいだね」、B「きみはお母さんにそっくりだね」という伍長の言葉をふまえて、くわしく説明しなさい。

文法の知識④ 助動詞の意味・用法を中心に

◉助動詞の学習　シリーズ5年上第6回・第7回　5年下第6回
6年上第15回「四科のまとめ」P.84〜86　参照。

問一 **次の1〜12の各文中の「れる・られる」（活用した形のものもあります）の用法は、ア〜エのどれと同じですか。それぞれ記号で答えなさい。**（5年上第6回P.72「四科のまとめ」P.84）

ア 病気の母が案じ**られる**。
イ 校長先生が教室に来**られる**。
ウ 飼い犬に舐め**られる**。
エ 五分で食べ**られる**分量だ。

1 元帥閣下が入城さ**れる**。
2 幼児でも登**られる**高さだ。
3 故郷の山々が思い出さ**れる**。
4 まんまと王様にだまさ**れ**た。
5 山頂から全市街が見**られる**。
6 宝物が全部盗ま**れ**たようだ。
7 お客様が帰**られる**ようだ。
8 風に秋の訪れが感じ**られる**。
9 この服はまだ着**られる**よ。
10 満員電車で足を踏ま**れる**。
11 先人の苦労が偲ば**れる**。
12 先生が自作の詩を朗読さ**れる**。

問二 **次の1〜8の各文中の「う・よう」の用法は、ア〜ウのどれと同じですか。それぞれ記号で答えなさい。**（5年上第6回P.72「四科のまとめ」P.85）

ア 間もなく夜も明け**よう**。
イ 毎日一時間は読書し**よう**。
ウ さあ、みんな帰ろ**う**か。

1 一所懸命走ろ**う**と心に誓う。
2 村人全員で念仏を唱え**よう**。
3 金次郎も五時までに来**よう**。
4 計算問題を十問やろ**う**と思う。
5 この分なら明日は晴れ**よう**。
6 必ず時間内に仕事を終え**よう**。
7 さっさと寝**よう**じゃないか。
8 会議は予定時刻に始まろ**う**。

問三 **次の1〜10の各文中の「た（だ）」の用法は、ア〜ウのどれと同じですか。それぞれ記号で答えなさい。**（5年上第6回P.73「四科のまとめ」P.85）

ア 昨日、公園で遊ん**だ**。
イ 今、宿題が終わっ**た**。
ウ 赤く塗っ**た**壁の前に立つ。

1 池の水は濁っ**た**緑だった。
2 ちょうど今帰っ**た**ところだ。
3 幼い頃暮らし**た**町を訪ねる。
4 帽子を被っ**た**少年が金次郎だ。
5 淀ん**だ**川の水が少し流れた。
6 ここでは激しい戦争があっ**た**。
7 私は着い**た**ばかりです。
8 以前読ん**だ**本を読み返した。
9 昨夜の台風で大木が倒れ**た**。
10 目が覚め**た**ばかりでまだ眠い。

問四 **次の1〜12の各文中の「ない」は、ア＝助動詞、イ＝形容詞、ウ＝その他、のどれにあたりますか。それぞれ記号で答えなさい。**（5年下第6回P.72・73「四科のまとめ」P.84）

1 金蔵の中にはなにも**ない**。
2 ハチ公は駅前にい**ない**。
3 この作品は実につまら**ない**。
4 波が荒くてとても泳げ**ない**。
5 くだら**ない**話を聞かされた。
6 この本はおもしろく**ない**。
7 大会も近いのに練習し**ない**。
8 失敗が続き情け**ない**ばかりだ。
9 ひどく転んだが痛く**ない**。
10 はか**ない**夢に終わった。
11 ひとりぼっちで楽しく**ない**。
12 梵語の経典は全く読め**ない**。

問五 **次の1〜8の各文中の「そうだ」の用法は、ア・イのどちらと同じですか。それぞれ記号で答えなさい。**（5年上第7回P.84「四科のまとめ」P.84）

ア 明日は晴れる**そうだ**。
イ 明日は晴れ**そうだ**。

1 もう危険はなさ**そうだ**。
2 金太郎の機嫌は良さ**そうだ**。
3 宝くじに当たった**そうだ**。
4 今にも城は崩れ**そうだ**。

5 会議は五時に終わるそうだ。　6 明日には桜も散りそうだ。
7 王に軍資金はないそうだ。　8 金次郎の調子は良いそうだ。

問六 次の1～12の各文中の「ようだ（活用した形のものもあります）」の用法は、ア～ウのどれと同じですか。それぞれ記号で答えなさい。（5年上第7回P.84・85「四科のまとめ」P.84）

ア 問題は解決したようだ。　イ 桜の散り際のように潔い。
ウ ダビンチのような天才だ。

1 金太郎が犯人のように思う。　2 鏡のような湖面に富士が映る。
3 JFKのような政治家だ。　4 蜂の巣をつついたような騒ぎ。
5 二宮尊徳のように勤勉だ。　6 事実は報告とは違うようだ。
7 猫のようなペットが欲しい。　8 降る雪のように花は散った。
9 王は開会式に遅れるようだ。　10 剣のような尖塔がそびえる。
11 野球のような球技が得意だ。　12 だれも真相を知らないようだ。

問七 次の1～10の各文中の「らしい」は、ア＝推定の助動詞、イ＝形容詞をつくる接尾語、ウ＝その他、のどれにあたりますか。それぞれ記号で答えなさい。（5年上第7回P.85「四科のまとめ」P.85）

1 金太郎はとても強いらしい。　2 子供らしい行動だった。
3 すばらしい風景が広がった。　4 犯人らしい男が現れた。
5 雨らしい雨が全く降らない。　6 この手の物はめずらしい。
7 あの山小屋が目的地らしい。　8 昨日来たのは金太郎らしい。
9 人を騙す憎らしい奴だ。　10 いかにも金次郎らしい意見だ。

問八 次の1～12の各文中の「だ」は、ア＝断定の助動詞の「だ」、イ＝過去の助動詞「た」が濁音となったもの、ウ＝形容動詞・言い切りの「だ」、エ＝その他、のどれにあたりますか。それぞれ記号で答えなさい。（5年上第3回P.39　5年下第6回P.73）

1 桃源郷は理想の土地だ。　2 明日は金太郎も来るそうだ。
3 読んだ本を積み上げた。　4 祖父の仕事は実に緻密だ。
5 我々が求めるものは自由だ。　6 向こう岸まで必死で泳いだ。
7 九十歳になる祖父は元気だ。　8 桃源郷の祭りはにぎやかだ。
9 夏休みはもうすぐだ。　10 あわてていたので転んだ。
11 山頂に見えるのが証城寺だ。　12 その村は桃源郷のようだ。

問九 次の1～8の各文中の「まい」は、ア＝打ち消しの推量、イ＝打ち消しの意志、のどちらにあたりますか。それぞれ記号で答えなさい。（5年下第6回P.73「四科のまとめ」P.85）

1 失敗を繰り返すまいと思う。　2 しばらくは雨も降るまい。
3 二度と行くまいと心に誓う。　4 金輪際あの人には頼むまい。
5 恥をかいた金太郎は来まい。　6 この戦争はすぐ終わるまい。
7 恥をかくまいと心を砕いた。　8 それでは母も安心しまい。

問十 助動詞「せる」「させる」は、「他に何か動作をさせる」という意味を表し、これらを〈使役〉の助動詞と言います。次の1～6の中から、これらとは性質の異なる表現をすべて選び、記号で答えなさい。

1 弟に国語の教科書を大きな声で読ませる。
2 いやがる妹に私のお古のセーターを着せる。
3 王様に電話して私の家に来させることにした。
4 好き嫌いを言わせず弟に野菜を食べさせる。
5 旅行先で撮った写真を集まった友達に見せる。
6 逃げまわる兄をつかまえ英語の勉強をさせる。